

序文

私のヴォイニッチ手稿との出会いは次の通りである。William F. Friedman が 1951 年私にこの手稿を紹介してくれ、私は暇な時間を利用し最も共通して現れる記号の組み合わせを研究することにした。私は Friedman 氏のために研究報告を書いた。申しておかなければならないのは当時私が入手できたのは手稿の一章分、20 ページであり、そこには絵は描かれてはいなかった。事実は彼はわざと私をコントロール(対照実験)に用い、Newbold の著書『The Cipher of Roger Bacon』の中にある手稿の情報以外を伝えなかったのだ。この研究から私はテキストがたとえ何語で書かれていようと、その記号の置換によっては到達し得ないものだという確かな結論にたどり着いた。

その後およそ 12 年前、私は Baltimore Bibliophiles へ投稿された手稿の歴史といくつかの解読の試みを扱った論文を読んだ。この論文はほとんど変更のないものが internal office journal から出版されていた。

1975 年の秋に私はこの研究者のグループへ向けられた一通の論文を読んだ。この機会は組織内へ広く宣伝されて、たくさんの聴衆を引きつけ、そのうちのいくらかはこの手稿の研究へと参加することになった。

Friedman 氏の健康が悪化し始めてからは、私が非公式にこの問題に取り組む幾人かのコーディネーターを務めさせていただき、そして Mary D'Imperio 女史から興味を話していただいたとき、彼女にこの責務を引き受けてもらうことをお願いした。

彼女は私よりより分かりやすく、より学究的調査をし、それはこの分野の未来の仕事で決定的背景となることを信じている。

私の知るところでは手稿中の文字に関しては Friedman、私、Prescott Currier 大佐による 3 つのかなり大がかりな分析があった。もちろん私は Currier 大佐によるものが最も完璧なものだと思っている。少なくともいくつかの観点でこれら 3 つの調査は似た結論となり、私はこれらの分析をふまえていない解決の主張はどんなものであれ受け入れることはできない。

John H. Tiltman

24 November 1976